



隊員からの便り (2005/9/25到着)

チュニジア便り チュニジアンブルーの空の下(第16号)

SV 船舶電気 スファックス市勤務 立花邦彦

2回目となるチュニジアの暑い夏がやってきました。同期で派遣された方々は一様に「暑くてたまらない」と言われるが、寒さに弱い暑さには強い私にとっては、とてもありがたい季節です。確かに直射日光の下での作業は、ある意味、命がけであることに間違いはないのです。しかし20数人いるシニア海外ボランティアで、そのような業務をしているのは私一人であり、他の人達の殆どは冷房のきいたオフィスでのデスクワークであり、私からすればとても恵まれた環境で活動されているのに贅沢な不満だということに。年配の方々には失礼な言い方になりますが、年をとると暑さ寒さが体に応える、と世間一般的に言われていますから、そうなんだろうと勝手に解釈しています。

ちなみに、今住んでいるアパートにエアコンをつけてもらっていますが、夏には一度も使ったことがなく、もっぱら底冷えのする冬の暖房に使っています。

ヨーロッパの国のテレビニュースから日本という国の注目度を考えてみました。全ての国のニュース番組を見ることはできませんから、フランス(TV5)、スペイン(TEV)、イタリア(RAI)の3つを代表的とさせていただきます。9月当初、日本では衆議院議員選挙が行われました。その少し前にヨーロッパでは大雨で、あちこちの国で広範囲で浸水したりという被害がでていました。そんなこともあってだと思われるのですが、選挙前に選挙が行われることが流されたのは数回で一回あたりの時間も10秒程度がやっと。開票が終わって結果がでたときの扱いは、20秒程度と少し長くなりました。しかし、ヨーロッパでの出来事や、イラクやパレスチナ関連の報道からすれば、小さく取り上げられた程度のことに関心の無さがうかがえます。

アメリカの場合、大統領選挙や今回の台風被害については毎回1分程度の枠が取られていることを考えれば、日本とは大きく違うということが分かります。ちなみに、日本の台風被害については一度も見てませんから、たぶん報道が流されていないと思います。中国が台風の被害を受けたときには映像が流れていました。その程度なのです。その昔、「ニホンナッシング」という比喩がされていたことがありました。今は聞くこともなくなった言葉ですが、ヨーロッパのニュース番組を見る限りでは、今日現在もそのような状態なんだと思っています。

そこで、という訳ではありませんが、仕事をしている会社の従業員達に世界地図を見せどこがチュニジアでどこが日本なのかを示してもらおうということをしてみました。この調査は10名で実施してみました。彼たちの中で自分たちの国の位置を正しく指すことができたのは1人、日本の位置については悲しい現実ですが「0」でした。学歴はというと中卒以上が半分、残りの半分はそれ以下という状況です。全員日本の小学校相当は終了しているので、世界地理について教育を受けているはずなのですが。ちなみに、大卒の会計担当者も間違っていました。唯一の部分正解者は専門学校で船舶関係の勉強をしていた技術者なので、納得できる場所があります。

日本でもチュニジアという国の知名度が低いようなので、正しく位置を示すことが出来る人は50%以下ではないのでしょうか。ちなみに私もアフリカ大陸中南部の国とソ連から分離した多くの国については、あやしいものです。

同じ事をヨーロッパの国でやってみたらどのような結果になるのでしょうか。非常に興味深いものがあります。日本では万博が開催され、多くの方々が入場されたと聞きますから、普段多くの情報が入ってこない国についても、いろいろと新たに知ることができたのではないのかと思っていますが、その実情はどうなのでしょう。



残り任期半年をきって、業務はさらに忙しさが加速してきています。

夏の直射日光下で屋外作業が行われている船については、当初の予測以上に品質が悪く、日本なら受け取ってもらうことができないような状態なのですが、そこは形になっていれば問題なしの国なものですから、ごまかしのための追加の加工をして、船として仕上げるための作業が続けられています。作り直すことなど資金的、時間的にできることではないので、見てないことにしています。「長持ちしない船」に向けて一直線であることは間違いないのですが、今更、後戻りすることもできないのです。



小生設計の6.5m作業船のオス型製作用フレーム

外作業は問題があることを工事着手前から幾度と無く言ってきましたから、彼らもなにも問題が無いとは思ってはいないと思うのですが、なにも打つ手が無いという現実があるのです。

今後は漁船も作るようにすると会社の方針転換した、もう片方の活動先では、以前先行投資で購入していたケルケナ諸島にある工場の整備を開始し、本格的に製造をすることができるように準備しています。現在、メス型製作のためのオス型を製作中なのですが、メス型が出来上がったらケルケナに持って行って、向こうの工場生産を始めるということで、オス型の仕上げを急いでいるところです。

プレジャーボートだけではなく、漁船も作るようになったことはいいことなのですが、あれこれと注文が多くて設計者泣かせな一面もあります。



DD-28(8.5m)漁船
左右対称になっていないのが分かります

今はきちんとした設計を行うことができますから問題はないのですが、私の任期終了後、船舶設計者がいなくなったときに、この国でどうやって新しい船の設計を行っていくのかが問題となります。ヨーロッパの会社から図面を購入するという方法もあるのですが、そこまでやるのかは不明です。古いメス型を買ってきても、いい船にすることが出来ない事を言っていますから、今後、古いメス型を買うことは無いと信じています。「インシャラー」のお国柄ですからどうなることやら分かりませんが。

いずれにせよ、今後、この国で使われている多くの木造漁船をFRP漁船にするには設計のできる技術者の養成と行政、漁民の理解がないことには、そうそう簡単に進むということはないでしょう。零細漁民が使用している木造船をFRP船にするには行政からの援助がないことには無理であることは明白です。

残り任期が2ヶ月少となり、今まで前任者が作成した図面や資料を含めてチュニジア側に電子データとして残せるように整理を始めたのですが思わぬ大敵が。図面を描くのに日本の中小建築業界で標準となっているJW-CADと呼ばれるCADのフリーソフトを使っているのですが、ここではオートキャドが使われているので、一度中間データにしてからオートキャドの図面にする必要があります。ところが、文字の大きさや曲線データが変わってしまうという事実が発覚したのです。100枚を超える図面全てをチェックして手直ししなければならないことになり、自分で余分な仕事を増やしたことになります。こちらの船舶設計事務所(鋼船専門)で設計変更を行うことができるようにするためには仕方の無いことなのです。鋼船しか設計したことがなくても、船の設計については知識が有るわけですから、この先、チュニジアでゼロからとまではいなくても、少々変更してという淡い期待を持っているのです。

下品な表現で申し訳ありませんが、「自分のけつは自分で拭け」ですから、今まで通り寝る時間を少し削って最後のがんばりをしているところです。これさえ乗り越えれば今計画中の船を除いて、新しい船の設計はしない(時間の制約があり実際にはとても出来る状況ではありません)ので体力勝負でやっています。夏の暑さから秋の快適な気温になってくれたのも手伝って、いいペースで作業が進行しています。



隊員からの便り (2005/11/29到着)

チュニジア便り チュニジアンブルーの空の下(第17号)

SV 船舶電気 スファックス市勤務 立花邦彦

帰国前に最後となる便りを書きます。今日は11月29日。明日の朝、早朝にはここを出発し、パリ経由で東京まで直行で帰国の予定です。ヨーロッパは寒気の影響でパリでも雪が降っているようですが、空港が閉鎖にならないことを祈っているところです。

さて、長かったようであり、短かったようなチュニジアでの2年でした。物作りに来ていて、物を残すことが出来た事が一番良かったことです。「お役所」と呼ばれる所で活動していたら、たぶん、「絵に描いた餅」が残るだけで、実際の船は1艇もできてはいなかったらと思います。隊員(青年海外協力隊員)が村などの組合や、NGO等で活動しているのと同じように、SV(シニア海外ボランティア)も、中央官庁や高等教育機関、研究所ばかりではなく、今回我々「FRP漁船グループ」が活動していたような組合(実際には組合員の私企業だったのですが)にも目を向ける必要があるのではないのかというのが活動を振り返っての感想です。チュニジアでは国策として工業のレベルアップや競争力をつけるということをはいますが、官庁の机の上や言葉だけのことであって、実際の企業の多くには、そのような考えはないのです。

メンツや誇りを非常に重んじる国民性が、この国で抱えている問題の根底にあるのかもしれませんが、もちろん、表向き民主政治の国であると言いながら、その実は独裁国家であることが、一番の問題点であることは周知の事実です。2008年、EU自由貿易圏に参加することが既に決まっていて、関税の撤廃(一部は残るものの)が行われたならば、「品質の悪い」チュニジア工業製品を好んで買う人は、殆どいなくなるのではないのか、という心配もあります。外国から高い品質で安い品物がどんどん輸入されるようになれば悪い品質の品物には目を向けなくなるのは当たり前の事です。まして生産性が非常に悪く人件費が安いと言っても、製品が出来るまでの時間を加味すると、ヨーロッパで生産されている品物と生産原価は殆ど同じであるとう事実もあります。(一部の外国資本により経営されている会社は、そこまでひどくはありませんが) 繊維産業は中国の台頭により、斜陽産業となっしまい、年々、輸出高が右肩下がりで、この先、回復するという観測は誰も持っていないような状況です。

「自分に益がないと動かない」というのも、この国の多くの人達の考え方です。この考え方が、アラブ圏全てに共通していることなのか、それともこの国独特の物の考え方であるのか、近隣のアラブ諸国には行ったことがないので分かりません。

自分が得た知識や経験は自分だけのものであって、人に全てを教えるということをしていないということは、中南米でも同じでした。人よりも優位に立ちたいがために、そのようにしているということは明らかです。今現在、約33万人いる大学生を3年後には50万人に増やすということが進められていますが、多くの質の高い教育者をこの短期間で養成することなど到底無理だと思えます。「質よりも量」では、工業製品の「安かろう悪かろう」となんなら変わるところがなく、本質的な国力アップの基礎となる若者達の教育も「おそまつ」から脱却することは難しいと思われれます。

有る程度お金に余裕がある家庭の子供達の多くは外国の大学等の高等教育機関で勉強をしています。彼らはそのまま外国で働くことが多いために、チュニジア国内にフィードバックされることも非常に少ないのです。

活動先に、大学院生が修士課程で必修である企業研修の為に来ていました。昨年の院生は非常に優秀(この国での評価)で、テーマ、内容共に、そこそこでした。しかし、今年の院生の場合、テーマはりっぱなものでしたが、中身が殆どないようなもので、これが修士取得の論文か、と疑いたくなるような、おそまつなものでした。担当教官は外国から来ている方でしたが、「なにを教えにきてるの？」というのが率直な感想です。年間、30万人を超える学生が大学を卒業し社会に出るのですが、就職することができる数は1/3の10万人に届かないのが実情です。対内外的な国勢調査の結果では失業率が15%程度となっていますが、話し半分以下が実際であり、大統領がいかに情報操作をしているのかを知ることができます。(残念ながら言論の自由はこの国にはありません。)

幾度となく侵略などがあり、それを乗り切ってきた人達の子孫なわけですから、体力的にも知力的にも優れた人達であると思うのですが、その資質を十分にいかしきれていない実情が残念なところではあります。



さて、FEP漁船を造るということに関しては、今回のグループ派遣が終了した段階でやっと芽が出始めたところなんです。品質や工程の管理ができない等、まだまだ色々問題点はありますが、図面を元にして製品を造るということに関しては技術移転をすることができたのかな、と考えています。今まで図面を見たことも使ったこともない人達に一から指導する訳ですから、一気に全てを完璧にということは求めませんでした。

70%程度出来るようになれば大成功だと個人的には思っています。未だに寸法が違ってしまっていたり、目を覆いたくなるような仕上がりだったりしますが、そこいらあたりは目を瞑って、よしとするようにしています。さすがに、FRPの積層厚みが違っていた時には、船が壊れてしまう可能性が有るために、急いで対策方法を書いて説明し、実行してもらったこともあります。今まではSKIFFと呼ばれる補助作業船ばかりでしたが今後は汎用漁船(2種類)を造る準備がほぼ整っていますから、これらの漁船が木造船にとってかわる時代が来ることを期待しています。ただ、最近の原油高で原材料費が高騰し従来、木造船の1.5倍から2倍していたFRP船の価格がさらに上がる見通しなのですんなりとは、木造船からFRP船にかわらないかもしれません。長い期間で見れば半年に1度は修理しなければならない木造船に比べて、トータル的な費用は少なくすむのですが、目の前の金額(最初の購入金額)が少ない方を安易に選んでしまう人が多いのが残念です。(一部にはちゃんと分かっていてFRP船を選ぶ人もいますが。)

環境面から見れば、FRP船の廃船処理をどうするか、製造工程で出てしまう端材をどうするか、と言った問題もあります。ゴミを野積みにし、自然発火で減容しているこの国のゴミ処理方法からすれば、お金をかけて処理工場を建設するなどということは到底望むことができないことです。しかし、船だけではなくあちらこちらでFRPが使われていることを考えれば、そろそろ国としても考えなければならない時期ではないのだろうかと思っています。こんなことを、いちSVが口にしたところで、国が動き始めることはないのですが、まずは最初の一步としてSFAX(任地)の有力者に話しを試みました。どうなりますやら。

10年ほど前までは、「中国製品は安かろう悪かろう」だったものが、急速に品質等向上してきています。チュニジアに対しても「安かろう悪かろう」から早期に脱却できる(する)ことを期待したいものです。「ISO9000を取得している会社の製品だから大丈夫」ということは残念ながら、この国の会社には当てはまりません。国内に認証機関がないために、外国の認証機関から認証をしてもらっているのですが認証後3年目に行われる更新が出来るのか疑問があります。体裁を気にするお国柄なので書類だけはきちんとしているでしょうから、問題ないとの認証機関の判断になるかもしれませんが。

コップか水差し1つが出てきて、それをみんなで回し飲みする、寒ければみんな寄り添って毛布を足にかけるだけ、という家にも何度も呼んでもらいました。

最初の人当たりはいいが、本音は出さない、なかなかうち解けないという、この国の国民性からすれば、かなりのところまで受け入れてもらうことができたのかなと思っています。中央官庁での活動であれば、庶民の生活をここまで知ることは到底出来なかったのではないかと思います。旅人としてではなく、友人として接してくれたSFAXの友人には心から感謝しています。出発当日に、大きな陶磁器をお土産に持たせてくれたのは、少々、有り難迷惑でしたが、彼らにしてみれば精一杯の気持ちの表れなのです。計画していたお土産を小さなものに変更しなんとかカバンに入るようにしました。彼らの気持ちを捨てていくことなどできませんから。

まだまだ知らないことは多いとは思いますが、私生活においては青年海外協力隊員に近い生活をおくることができたと思っています。

今回がこのSV活動最後の便りになります。日本からは遠い国ですから、そうそう簡単に来ることはできないでしょうが、チャンスがあれば遊びに来たいと思っています。ただし、冬の寒い時期はチャンスがあっても考えますが。